

フッ素徐放性光重合型コンポジットレジン
“Xeno CF”の臨床評価—特に乳歯について—

○日高彰子、小島幸美、西岡孝浩、西田郁子、
牧 憲司、木村光孝
九歯大・小児歯

【目的】

コンポジットレジンの登場により我が国においては接着性コンポジットレジンによる審美修復が飛躍的にのび、国民の福祉の向上と口腔の健康増進に大いに貢献している。その高い審美性と材料の強度、高い歯質接着性などの利点により幅広い症例に用いられている。しかしながらいかに的確に修復したとしても修復物周辺に二次う蝕にたびたび遭遇する。このためコンポジットレジンの欠点である細菌に対する感受性が低すぎる点を、フッ素徐放によって改善するべく“Xeno CF”（三金工業社製）が開発された。今回演者らは小児の乳前歯、乳臼歯におけるう蝕処置に“Xeno CF”を用い3年間の臨床評価を行ったので報告する。

【対象および方法】

平成10年4月から平成11年3月までに九州歯科大学付属病院小児歯科外来を受診した小児に乳前歯および乳臼歯に“Xeno CF”を応用し、各修復歯に対して二次う蝕の発生率、耐磨耗性、歯髄刺激性、色調安定性、歯質への接着性について走査型電顕所見を含め3年間観察した。

【結果及び考察】

“Xeno CF”修復システムの臨床性能は良好で大変有効な接着システムであることが明らかとなった。優れた歯質接合性を示し、審美的にも良好な修復が可能である。

このレジンボンディングシステムは簡便な接着操作にもかかわらず歯質に対し確実な接着性を示し、さらにフッ素を徐放することに二次う蝕の防止に非常に有効であるということが明らかとなった。今後、ボンディング材の保存性、ならびにレジンペーストの色調に改良が加えられた開発の期待が待たれる。

若年者顎関節症の症型別発症頻度と臨床的検討
—特に変形性関節症について—

○藤本 純、重田浩樹、松本祐子、長谷川大子、
石谷徳人、山崎要一
鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科 健康科学
専攻 発生発達成育学講座 口腔小児発達学分野

【目的】日本顎関節学会は2001年に「顎関節症診療に関するガイドライン」を発表し、その中で、顎関節症の症型分類の手順および診断基準を提示している。今回、そのガイドラインに基づき、若年者顎関節症患者を対象に症型別発症頻度を調査したので報告する。

【方法】対象者は鹿児島大学歯学部附属病院小児歯科外来を訪れ、X線断層撮影やMRI撮影を行い、顎関節症と診断された6歳から20歳（平均年齢14.6歳）の213名（男子：34名、女子：179名）である。その対象者を15歳未満と15歳以上に分け、それぞれ「顎関節症診療に関するガイドライン」の診断基準を基に症型分類を行った。

【結果】15歳未満の対象者は男子12名、女子101名の113名であった。症型分類の結果はI型8名（7.1%）、II型3名（2.7%）、III型99名（87.6%）、V型3名（2.7%）であった。15歳以上の対象者は男子22名、女子78名の100名であった。症型分類の結果はI型6名（6.0%）、II型6名（6.0%）、III型72名（72.0%）、IV型11名（11.0%）、V型5名（5.0%）であった。

【考察】今回の調査において15歳未満ではIII型が最も多く、次いでI型、II型、V型の順であった。15歳以上でも同様の傾向を示し、III型が最も多かった。成人の顎関節症の症型別発症頻度を調査した報告と比較し、頻度順は変わらなかったものの、III型の占める割合が多くなっていた。これは、若年者の顎関節症の特徴として顎関節形態との関連が強いことを示している。

また、15歳未満で骨変形が認められた患者は15名（13.3%）であり、15歳以上では11名（11.0%）であった。骨変形の有無で、臨床症状と治療経過について比較したところ、特徴的な傾向は認められなかった。これは、若年者では骨変形の有無が重症化の指標とはならないことを示唆していると思われる。